乳幼児教育相談（けやきルーム）の実態と取り組み

両角五十夫・佐藤幸子・宍戸淳子・林　徳子・森　敬子・小柳達朗

研究の概要

近年、先天性の聴覚障害を早期に発見するための新生児聴覚スクリーニング検査の普及により、早期支援の内容が多様化してきている。そこで、本校乳幼児教育相談における早期支援の実態を明らかにし、その実態に応じた支援のあり方や取り組みについてまとめた。乳幼児期の補聴、及び聴覚活用の考え方や、両親支援、特に母親支援の在り方、また、支援体制のひとつとして、チームティーチングの試みについてまとめた。

【キーワード】　乳幼児教育相談　早期支援　聴覚活用　両親支援　チームティーチング

新生児期に発見が可能な聴覚障害は、1,000人の出生につき１～２人（正常新生児では、1,000人の出生につき、0.5人、NICU入院例では、約２～３％）と言われている。

近年、先天性の聴覚障害を早期に発見するための新生児聴覚スクリーニング検査は、急速に普及してきている。そのため、聴覚障害のある乳幼児やその両親に対する極めて早い段階での支援が可能となった。また、それまで、発見が見逃されがちであった軽度・中等度難聴の赤ちゃんの早期発見、支援も可能となった。

それに伴い、軽度・中等度難聴への対応、カウンセリング機能の充実、赤ちゃんの聴覚や言葉以外の全体的な発達や育児一般に関する支援の必要性、早期の補聴器装用や人工内耳支援など早期発見後の支援内容が多様化してきている。

また、支援内容の多様化に伴い、乳幼児教育相談担当者に求められる専門性の維持や担当者の補充の必要性など、人事体制の整備に対する課題が各地の担当者の声として挙がっている。（庄司ら、2011）

そこで、今回、筑波大学附属聴覚特別支援学校における乳幼児支援の実態について明らかにし、その実態に応じた支援のあり方や取り組みについてまとめることにした。

Ⅰ．所属する幼児の実態

１．所属人数

平成24年度12月20日現在では、48組の母子が本校の乳幼児教育相談に通ってきている。**図１**は、年齢別の構成を表したものである。

その中に、軽度・中等度難聴のケースは７組、聴覚障害以外の面で他機関のフォローが必要なケースは、７組含まれている。

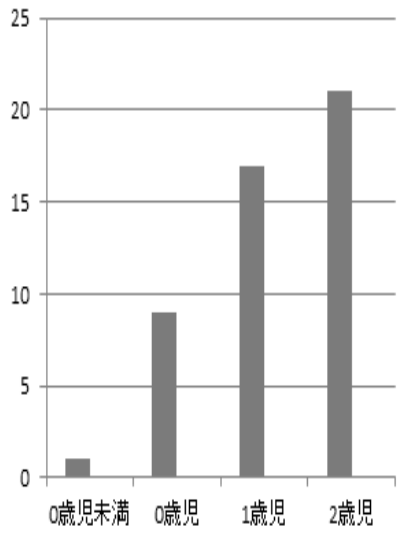

図１　平成24年度12月現在での年齢別人数

図２は、平成１年度から現在までの、所属乳幼児の年齢別割合の推移を示したものである。H15年度以降、０歳代の割合に増加が見られる。新生児聴覚スクリーニング検査の開始により、軽度・中等度難聴や一側性難聴、および重複障害を併せ持つ難聴が早期に発見されるようになり、本校への来校時期が早まってきたことが一因として考えられる。なお、H24年度のデータは、年度途中のものであるため、年度末には、０歳代の割合がさらに増加することが見込まれる。

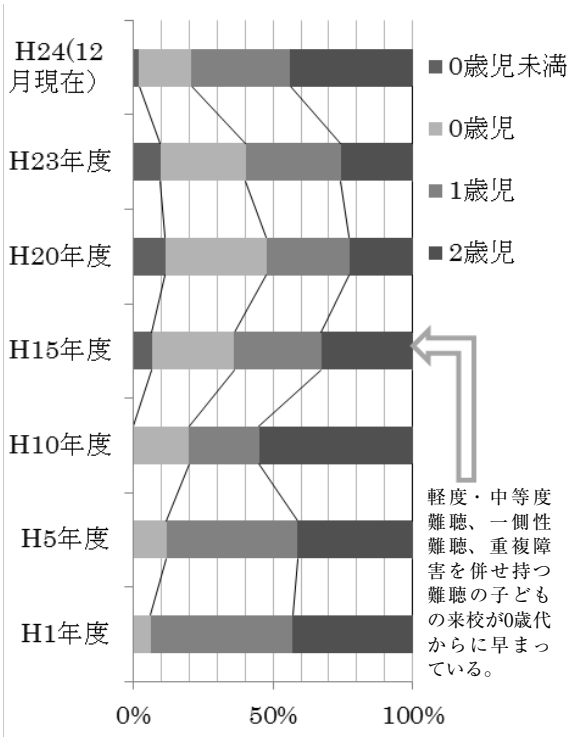

図２　所属乳幼児の年齢別割合の推移

２．聴覚障害の程度

図３－１は、H24年度、**図３－２**はH13年度の全所属属乳幼児の良聴耳の平均聴力レベルを、分類したものである。

聴覚特別支援学校が主として対象とする,高度から重度の聴覚障害への対応が、H13年度には、80%近くを占めていたが、現在は全体の45%になっている。とりわけ、90dB以上の割合に大きな変化が見られる。人工内耳装用が普及してきた影響であろう。2006年には、日本耳鼻咽喉科学会による小児人工内耳適応基準が改定され、それまでの２歳以上という規定から１歳６ヶ月以上と適応年齢が下げられた。それゆえに、人工内耳に関する具体的な相談や、医療機関との連携は、乳幼児段階の支援の中で欠かすことのできないものとなっていくことが考えられる。

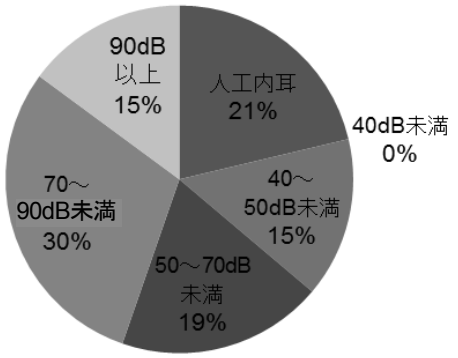

図3-1　H24年度所属幼児の聴力の程度

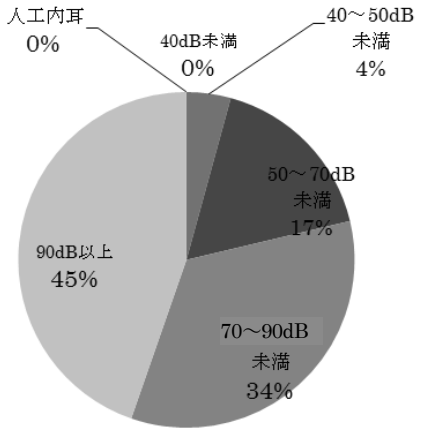

図3-2　H13年度所属幼児の聴力の程度

３．乳幼児教育相談終了後の進路

乳幼児教育相談での支援は、一部を除いて、満３歳となった後の３月末で終了となる。**図４**は終了後の進路を割合で示したものである。

平成15年度以降、終了後の進路として、軽度・中等度難聴の子どもが、幼稚園や保育園に通ったり、重複障害のある子どもが、発達センターでの支援を中心にしたりするケースが増えてきている。いずれの場合も、本校の補聴相談で、聴力検査や補聴器の調整などを適宜行いながら個々の相談にその都度応じていっている。

相談対象の多様化に適切に対応していくために、より幅広い支援内容が求められているといえる。

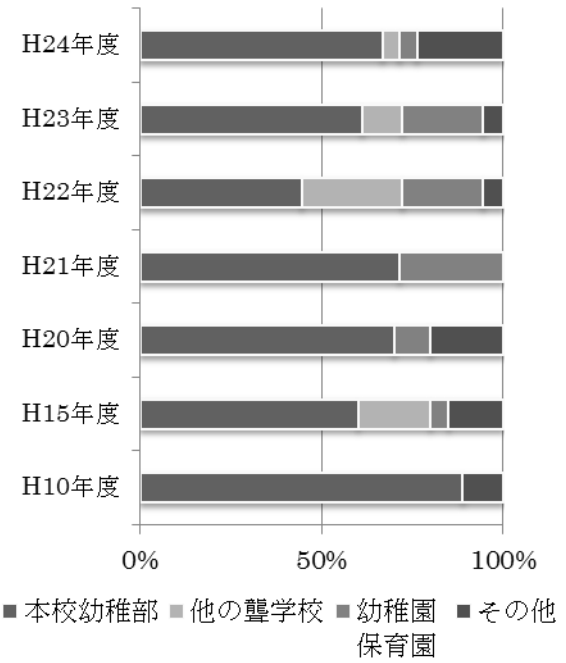

図４　乳幼児教育相談終了後の進路の推移

Ⅱ　相談活動の概要

１．相談システム

図５は、本校乳幼児教育相談の支援システムを図式化したものである。支援は、両親支援が主軸となっている。その活動形態として「グループ活動」「個別指導」「補聴相談」「講座・懇談」が位置づけられている。担当者については、３歳未満児の教育相談担当の予算配置がなされていないため、幼稚部から高等部、専攻科を含めた全校的な配慮により、現在４名の教員が、配置されている。さらに、全校の補聴担当者１名が、乳幼児教育相談所属幼児の補聴担当も兼務している。その他に、非常勤講師を２名配置している。

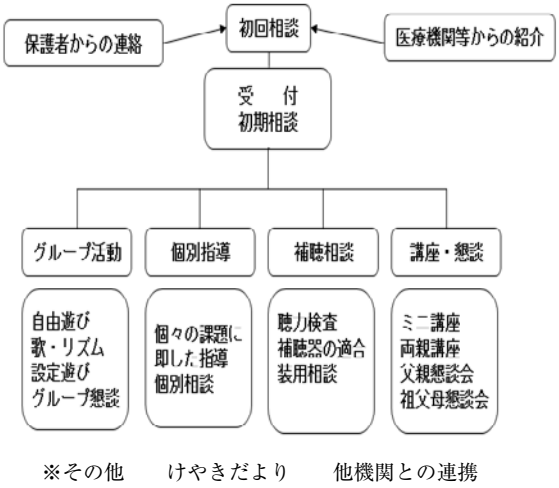

図５　けやきルームの支援システム

２．各支援の内容とねらい

（１）受付，面接

けやきルームを訪れる子どもは、診断を受けた病院で紹介を受け、問い合わせてくるケースが多い。また最近は、両親がインターネットで情報を得て、問い合わせてくるケースも珍しくない。問い合わせをしてくるのは、主には母親であるが、父親や祖父母等からの相談も多くなってきている。初回の問い合わせには、原則として幼稚部主事が窓口となる。ここで大まかな相談内容を聞いた上で来校日が決められることとなる。両親に、実際のグループ活動の様子に触れてもらい、母子で過ごす具体的なイメージをもってもらえるよう、できるだけ同じ年齢のグループ活動日に設定できるようにしている。

主事と面接の後、幼稚部や乳幼児グループを参観した後、受付が決まると、主事から乳幼児教育相談担当者に引き継がれることになる。

（２）グループ活動

グループ活動は、０，１，２歳児の各年齢ごとに、５～６人程度のグループを作っておこなっている。**表１**はグループ活動の日課の例である。０，１歳児

は週１回、２歳児は週２回のペースで行っている。

① 補聴器点検：親子で自由に遊んでいる中を担当者が巡回して行う。実際に子どもの補聴器の音を聞き、出力、音質、イヤモールドの状態などを点検する。その際、母親とのやりとりから、日常的な家庭での補聴器の手入れや管理についてのアドバイスも適宜行うようにしている。ここでは、補聴担当者と密に連絡を取り合いながら、補聴器の不具合やハウリングについての相談にも随時対応している。

② 自由遊び：本校では、自由遊びにおける親子の関わりを重視している。母が子に寄り添うこと、子と共に動いてみること、子に働きかけること等を通して、子の表出や行動の意味を担当者と共にとらえていけるようにする。具体的なアドバイスや実際に担当者が子どもと関わってみせることで、母が子の思いをつかむ視点や感性、想像力、実行力が培われていけるよう支えていく。

③ 設定遊び（リズム遊び、手遊び、絵本、製作など）
母子が楽しく生き生きと参加できるように担当者が遊びの設定を行う。年齢ごとに扱う内容や長さは違ってくるが、いずれの場合も、母親が子どもの心の動きをつかみ、積極的に応じたり、働きかけたりできるように支援していくことが欠かせない。常に母子の様子に目を配り、必要に応じて声をかけていくように心がけている。

④ 昼食（お弁当）

１歳児と２歳児のグループ活動時には、母子それぞれにお弁当を用意してもらっている。担当者は、子どもたちが少し食べ始めるまでの間、子どもに「おいしいね」「はやくたべたいね」等と声をかけたり、食事に関する母親の悩みに耳を傾けたりする。また、母親同士の情報交換の場としてもとても大切な役割を持っている。

０歳児のグループ活動は、昼食の時間は設定されていないが、ほとんどの母子が昼食を持参し、終了後に残り、母親同士のおしゃべりを楽しんでいる。

⑤ グループ懇談

活動時の午後、担当者１名が入り、その日の子どもたちの様子、活動のねらい、関わり方について話しあう。また、母に提出してもらった週の記録の中から、母親みんなで共有できそうな話題を取り上げ、悩みやアイデアを出し合ったりすることもある。担当者含め、互いに学び合ったり、悩みや喜びを共有したりできることが何よりも大切なねらいとなる。

集団行動が難しい０歳代であってもグループ活動を位置づけるねらいや意義は、まさにここにあると言える。

表１　グループ活動（日課の例）

	0歳児	1歳児	2歳児
		・補聴器の点検	・補聴器の点検
10:00	・補聴器の点検	・親子で遊ぶ	・親子で遊ぶ
	・親子で遊ぶ	（室内遊び）	（室内遊び）
	（室内遊び）		
10:30		・手遊び歌	・名札付け
	・手遊び歌	・リズム遊び	・手遊び歌
	・リズム遊び	・絵本　　など	・リズム遊び
11:00	など		・絵本、紙芝居
	・懇談	・外遊び	・製作　　など
11:30			・外遊び
		・昼食（お弁当）	
12:00			・昼食（お弁当）
		・清掃	
		・懇談（グループ）	・清掃
		・あいさつ	
13:00			・懇談（グループ）
			・シール貼り
13:30			・あいさつ

（３）個別指導

個別指導は、月１回、グループ活動とは別の日程で設定をしている。他機関ベースで、本校でのグループ活動に参加していないケースへの対応としても個別指導を行っている。

乳幼児の発達には聴覚活用を含め、個人差が大きい。また、補聴に関することや、兄弟との関係、子育て全般に関することなど、母親が抱える悩みも多岐にわたり、日常の些細な出来事がきっかけになり、母親が不安定になることも多い。個別指導は、担当者と母親が、子どもについて具体的に話しあい、共

に悩み考えながら健やかな母子関係を育む場としての重要性を担っているといえる。

また、担当者が子どもの実態に応じた指導内容を計画し、継続して扱うことが可能である。担当者と子どもが直接やりとりする中で、担当者自身の気づきや母親の気づきをその場で出し合い、具体的なアドバイスをしたり、母親自身が工夫してみようとするきっかけにつながっていく。

（4）個別面談

各学期末に、１回、原則、担当者と母親とで行われる。共に学期を振り返りながら、子どもの成長した点、及び次へ繋がるとりくみについて1時間程度話し合われる。具体的な内容は、ケースによって様々であるが，いずれの場合も、母親が前向きに子育てに向かい、子どもとの関わりを楽しめるようにしていくことをねらいとしている。子育ての中で生じる問題に、母親自身が自ら解決していこうとする意欲と自信が培われるように、温かな言葉で、母親の日々の努力を労ったり、励ましたりすることが非常に重要となっている。

（5）補聴相談

乳幼児教育相談では、病院からの紹介状をもとに、早めの補聴器装用をすすめる。しかし、障害が発見されてから身体障害者手帳の申請をし、補装具交付券を受け取るまでには約２ヶ月はかかる。そこで初回の面談では、保護者の意向を聞きながら、障害者手帳が交付されるまでの対応を相談している。

最近の傾向としては、新生児聴覚スクリーニングで早期発見されることで、年齢的にも早期に補聴器を装用するケースが多くなった。

そこで、補聴相談としては、医療機関との連携を重視し、互いの聴力検査のデータを細かく見ながら補聴器を調整するなど、病院、保護者、補聴相談担当者の連携に努めるようにしている。また、できるだけ学期に１回は、聴力検査を行うようにしている。

そして、乳幼児教育相談でのグループ活動や個別指導などの指導の中で装用の状態を観察したり、母親の週の記録の中に書かれている聴覚に関する事項について乳幼児教育相談の担当者から報告を受けたりして、常に聞こえに関する情報に気を配りながら乳幼児に対する補聴器の装用状態を見ていっている。

（6）講座，懇談会など

補聴器や人工内耳を通しての聞こえに関する講座、子どもとの関わりに関する講座など、日頃の母親達の興味や疑問などからテーマを設定して行っている。また、６月には父親保育、２月には、両親講座を行っている。日々の育児の中心的な担い手は母親であることが多い。このような機会を通して、父親が子と積極的に関わり、成長を見守るひとつのきっかけとしたい。あわせて、母親に対するバックアップの役目も果たしてほしいと考えている。

９月には祖父母対象に、祖父母懇談会を行う。幼稚部を参観し、後に懇談会を持つ。祖父母ならではの不安や悩みも多く、様々な感想がでてくる。一つ一つに丁寧に応じながら、聴覚障害やことばの発達に対する理解と、母親に対するサポートの大切さを伝えている。

（7）他機関との連携

連携先の機関で最も多いのは、子どもの紹介元の病院である。母親を通じて、互いの聴力検査のデータを共有することが多い。また、近年では、人工内耳手術に関わる意見交換をしたり術後のマッピングの様子などを書面で伝えてもらったりすることもある。

また、保育園に通っている子どもも数名いるため、必要に応じて相互に参観し合っている。また、毎年２月にひらかれる「聴覚障害早期教育公開研修会」では、、担当保育士とけやきルームの担当者とで情報交換をする場も設けている。

Ⅲ．乳幼児教育相談の支援方法に関する考え方
―けやきルームでの取り組み―

１．乳幼児期の補聴、及び聴覚活用の考え方について

近年は新生児聴覚スクリーニングにより、数ヶ月の乳児から補聴器を装用することが可能となった。

補聴器を装用し始めた乳幼児の母親からは、なかなか補聴器をつけてくれない、本当に聞こえているのだろうかといった質問や相談が多く寄せられる。幼児の補聴器装用と早期補聴について考えてみたい。

（１）早期補聴の意義

補聴器を装用したからといって、０歳の聴覚障害幼児がすぐに話し始めるかというとそうではないことは明らかである。健聴の子どもであっても１歳のお誕生日の頃に何か言葉を使い始めるというのが一般的な発達である。でも、健聴児のそれに遅れながらも聴覚障害幼児も言葉を獲得していくということは多くの聴覚障害幼児の姿が物語っている。では、聴覚障害幼児はどのように聞き、言葉を獲得していくのだろうか。

表２は、聴覚障害幼児が補聴器の装用を開始してから言葉が出るまでどれくらいの期間かかったかを表したものである。70ｄＢ～90ｄＢでは装用開始後10ヶ月までに、100ｄＢを越える子では１年６ヶ月ぐらいでだいたい言葉が出てきている。Ｃ児、Ｈ児は同じ位の聴力レベルの子と比して、言葉が出るまでの期間が随分早い。これは、オージオグラムあるいは難聴のタイプに影響を受けていると思われる。平均聴力レベル算出に反映されない周波数において、比較的聴力の良いところがあることなども関係していると思われる。同様のケースとして、Ａ児、Ｄ児の例もある。

いずれにしても大切なことは、聴覚に障害のある子どもたちは、補聴器を装用することにより、時間はかかるが確実に言葉を獲得していくということである。装用時間が短い時期であっても母親の声が届くことで、言葉の学習のスイッチが入り、幼児は言葉の学習をスタートさせていく。補聴器装用開始当初は、５分装用するのがやっとという場合も少なくない。ある母親は、「我が子に補聴器を外されてしまうと、自分自身が拒否されたような気持ちになってしまう」と話していた。担当者は、母親が、焦らず根気よく子に話しかけをしていけるよう支えていくことが重要となる。

とりわけ、目に見える大きな変化が現れにくい時期は、母親の焦りや不安に寄り添いながら、変化がないように見えても子どもは母親や周囲の大人の話しかけに刺激され、着実に言葉を習得する過程を歩んでいること、子の頭の中では確実に変化が起きていることを信じて根気よく関わっていくことを伝えるようにしている。

表2　補聴器装用開始からことばが出るまでの期間

	良耳平均聴力レベル	補聴器装用開始年齢	初めてことばが出た年齢	初めて言ったことば	ことばが出るまでの期間
A児	50dB	0:09	0:09	ワンワン	0:00
B児	70dB	0:09	1:07	バイバイ	0:01
C児	78dB	1:01	1:04	ワンワン	0:03
D児	87dB	1:00	1:00	ママ	0:00
E児	92dB	0:06	1:04	アンパンマン	0:10
F児	92dB	0:07	1:05	ウンマ(食べ物)	0:10
G児	93dB	1:00	1:09	ドウゾ	0:09
H児	93dB	0:07	1:01	バイバイ、チョウダイ	0:04
I児	98dB	0:07	2:01	ポチャポチャ(お風呂)	1:06
J児	99dB	0:06	1:11	アンパンマン、ママ	1:05
K児	100dB	1:02	2:09	ワンワン	1:07
L児	100dB	0:05	2:02	バイバイ	1:09
M児	100dB	0:06	2:01	ワンワン	1:07

※「初めて言ったことば」は、子どもが発音した通りではなく、意味を正しい発音で表している。
聴力は、A児、J児を除いては、より正確な検査ができるようになった幼稚部での検査結果。
A児、J児は、乳幼児教育相談時の検査結果である。

（２）かかわりのポイント

次のような研究結果が報告されている。幼児に外国語を習得させるのに、ビデオ教材を見せたグループと見せなかったグループとでは外国語の習得に差は見られなかったというものである。ところが、ビデオ教材と同様の内容を、実際に大人が関わることで提示をしたグループにおいては、明らかに見せなかったグループよりも外国語の習得が良かったという。この事は、幼児の言葉の習得にとって、実際の人との関わりの中で学ぶことがいかに効果的であるかを証明している。

同じことは、聴覚障害の幼児についてもいえるだろう。訓練的に言葉を暗記させることよりも、幼児らしい生活や母親の愛情こもったかかわりの中で言

葉を聞き獲得していくことが言葉の効果的な育ちに繋がっていくと考える。それは、「幼児は自分の生活を離れて知識や技能を一方的に教えられ身につけていく時期ではない」（「幼稚園教育要領解説」文部科学省）といわれるゆえんである。

２．両親支援（母親支援）のあり方について

乳幼児教育相談において、両親支援、とりわけ母親支援は、重要な位置を占める。中村（2004）は「早期発見・早期療育の目的は、０歳時期の安定した母子コミュニケーションを保障し、必要な療育環境を整え、健やかな母子関係を育むことにある。その結果として、良好な言語発達が実現されることはあっても、それそのものが目的ではない」と述べている。

図６は、現在のけやきルームにおける、コミュニケーション力の育ちを支える母親支援の考え方を表している。

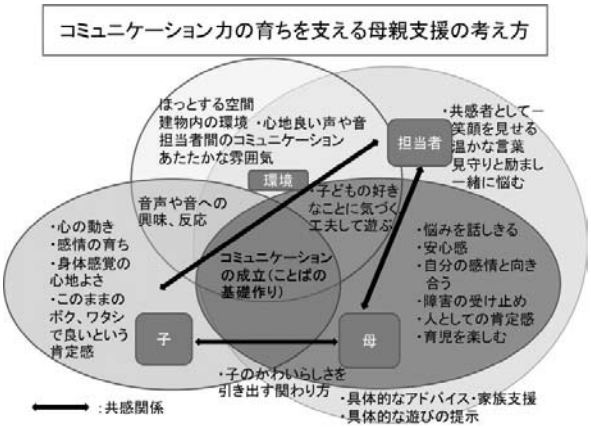

図6　コミュニケーション力の育ちを育てる母親支援の考え方

（１）明るく温かな雰囲気の中で

けやきルームを訪ねてくる多くの母子との出会いの中で、明るく温かな雰囲気の中でこそ、細やかな対応が生きてくること、子の音声や音への興味や反応が育ってくることを強く感じる。

来校時に母子の姿が玄関に見えたときには、できる限り担当者の方から笑顔で出迎え、温かく明るい言葉をかけることに気を配る。

けやきルーム全体の「雰囲気」は、目にみえるものではないが、母親にとって、非常に敏感に感じられるものであり、母親の心理状態に大きく関わるものである。出迎える担当者の表情やまなざし、ちょっとした言葉やしぐさからも、気持ちが明るくなったり，暗くなったりすることを実際の母親の声として耳にすることも多い。

（２）子に心からの笑顔で接する

来校初期の母親は、先が見えず，将来への不安から思い詰めることが多くなる。

そのようなときに、子どもの可愛らしさを引き出すような関わりや、母親自身が心から笑ったり楽しんだりできるような活動を工夫している。

また、担当者自身が心からの笑顔で赤ちゃんをあやしたり、かわいがったりする様子に触れてもらうことを通して、我が子の可愛らしさが実感できるよう心がけている。

ある母親は、「初めて来たとき、先生達がAのことをかわいい、かわいいといってたくさんあやしてくれた。その時、ああ、この子はかわいがってもらえる存在なんだ、と、とても嬉しかった。」と終了近くになって話してくれた。

（３）共に悩み考える信頼関係の構築

担当者と母親との間で「支援する－される」という関係が強い場合、母親の本来の思いをつかみ、理解していくことは難しくなる。庄司ら（2003）も「母親指導的な理念が先行すると、母親の問題意識と関係なく一方的に指導が行われたり、個々のニーズを無視して全員に同じ内容を同じ方法で一斉に指導することになるなどの問題が生じやすい」と述べている。

母親に対して子どもに応じた具体的で適切な助言や支援を行っていくためには、子どもの状態のみならず、母親の状態を的確につかむことが必要となる。

母親の悩みに耳を傾け、母親が今の思いを話しきれるまで、じっくりとつきあうことも時には必要になる。

その際、担当者自身が母親と心を通わせあう共感者となることから始めたい。「どんな些細なことからでも自由に話をしてもいい」「何を言っても否定されない」という安心感をもってもらうことを大事に考えている。

母親の悩みの背景には、兄弟姉妹や、祖父母との

関係などの家族関係に関することも多い。子や母が大事であるからこそ、その家族も大事にされなければならない。そのためにも母親と担当者との間での信頼関係をしっかりと築きながら「問題解決の糸口を共に探っていきましょう」というメッセージを送り続けることが大切であろう。

（4）母子間の共感関係を作る

聴覚障害児の言葉の育ちのために、母親に留意してもらわなくてはならない「関わり方」は多々ある。

例えば、「視線を合わせること」「正面から顔を見て伝えること」「近くで話すこと」などは、大事な要素ではあるが、その根底には，母子の間で心のベルを響き合わせ、心の通い合いが成立していること、つまり、「共感関係」が成立しているかが大きな鍵となる。

乳幼児期にコミュニケーション意欲を育てていくために、母親の心理的安定は欠かすことができない。

情緒的な響き合いが、声、表情、動作、視線、指さし等でのやりとりを生み出し、後でのことばでのやりとりにつながっていく。母が子の気持ちの動きに共感的になれるためには、母自身を取り巻く人や雰囲気を含めた環境への配慮が大事である。母親の心にゆとりや明るさや自信が生じてくると、子どもの何気ない姿がかわいいと思えたり、子ども自身の心の動きや遊びの様子に心を向けたりできるようになる。母親ががんばっている姿に常に共感を寄せ、母親が自分自身を肯定しながら楽しんで育児に当たっていけるよう支援を続けていきたい。

以下に、母子の共感関係を育むための具体的な支援の例と、「週の記録」での母と担当者とのやりとりの例を挙げる。

①　スキンシップを通しての気持ちの通じ合い

全身の感覚で様々なことを学んでいく乳幼児にとって、スキンシップ遊びは、母子で肌と肌を触れあうことで感情が交わされ、やりとりの心地よさを味わうことができる。スキンシップ遊びを楽しむやりとりを通して、子どもの中に喜怒哀楽の感情が育まれ、表情も豊かになっていく。母親にとっても、子の動作や表情、声など、身体全体を通して、子の心の動きを感じることができ、共に笑い合ったり、同じ楽しさを味わうことにつながる。

また、感情の育ちに伴って、子どもから周囲への発信が増え、声で関わろうとするなど、先での言葉の育ちに繋がっていく姿が見られるようになる。

－Ｋ－くんの母の記録より（１：05）

「ゆーらゆーら」と声をかけながら身体を左右に振り、「ぴたっ！」と言いながら動きを止める遊びが楽しいようで、「キャーキャー」と声を出して喜んでいます。

また、「のびのびねー」と言いながらおなかをさするのも大好きで、声やしぐさで要求してきます。最近では「ゆーらゆーら」「のびのびねー」というと身体を横に振り出したり、自分で身体を伸ばしたりしています。

〈担当者からのコメント〉

子どもは身体感覚全部で、様々なことを学んでいます。その意味で、身体を触れあわせる遊びはとても良い遊びですね。

大好きなお母さんの優しい声や表情、場の雰囲気を通していつもの楽しい遊びや心地良い感覚を思い出せるようになるのですね。

ほほえましい遊びを通して、楽しく言葉を学んでいますね。

②「言葉にならない言葉を読み取る」ための具体的アドバイスをしていくこと

「共感」とは、自分が実際に動かなくても、相手の動きや表情を通して、相手と同じように「心の動きをなぞる」ことができるということである。つまり、「言葉にならない言葉を読み取る力」のことである。

母親に心の動きをなぞりながら関わられた子どもは、相手に共感していく感覚を身につけ、相手の行動や表情や気持ちの動きを自らもなぞりながら、言葉の学習をしていくことが可能となっていく。

担当者は、母親に対して、「子どもと同じ動きをしてみる」「子どもと同じ表情をしてみる」「子どもと同じ高さに立ち同じものを見てみる」「子どもと同じようなおもちゃを持ち、同じように遊んでみる」などのアドバイスを、実際に担当者も示しながら、行っている。

－Ｉちゃんの母の記録より－（１：09）

ごはんやお菓子を食べているとき、必ず、他の人にも食べ物を分けてくれます。

〈担当者からのコメント〉

Ｉちゃんは、いつも自分がしてもらうように、自分の経験を再現しようとしているのですね。

自分以外の人が、自分と同じように“おいしそうに口を動かす様子”をじーっと観察しながら自分以外の人たちの心の動きをなぞっているのです。まさに、自分から「他者に対して共感を求める姿」のあらわれだと思います。このＩちゃんの行動は共感能力の育ちと言えますね。

（５）母子の自己肯定感を支える。

乳幼児が外界や他者と楽しく意欲的に関わっていけるようになるための心理的土台は「自己肯定感の育ちであると言われている。コミュニケーションの意欲と自己肯定感を育てるために、この時期、まずは、母親が自分をしっかりと包み込んでくれる、という安心感を子どもが得られるようにすることを大切にしたい。そして、母親に包まれる安心感から得られる人への信頼感を育み、自分から外界や他者と積極的に関わっていける力に繋げたい。

また、母親をサポートしていく中で、担当者が、母親の思い、悩み、考えに十分に寄り添い包み込みながら、母親自身の肯定感を支える事も、非常に重要な支援の在り方である。このような関わりは、母子の状況を的確につかみ、必要な情報を適正に提供していくことにも繋がっていくのである。

３．チームティーチングによる支援

乳幼児期は、心身の発達の基盤となる重要な時期である。この時期、両親，特に母親は心身共に不安定であり、子ども自身が多様な発達の問題を抱えている場合も少なくない。乳幼児教育相談担当者には、専門的な知識や経験に加え、母親や家族の思いを受け止め、今あるいは今後必要な情報を適正に提供できる力量が求められている。新生児聴覚スクリーニングの普及により多様化しているケース、一つ一つに細やかに対応していくためには、一人の担当者で抱え込まず、経験や視点の異なった複数の目で評価され見守られることが重要であると言える。

佐藤・庄司（2010）らも、必要な支援を提供していくためには、「チームで対応していくこと」が重要としている。

図７は、現在けやきルームで取り組んでいるチームティーチングによる支援を図式化したものである。今年度の担当者は、４名の常勤職員、補聴相談担当職員、２名の非常勤職員が配置されている。50組近い母子のグループ活動や、個別指導は主に、４名の常勤職員で行っており、うち２名が初任という状況である。

経験年数や年齢、得意とする関わり方等が異なる職員構成であるということを最大限に生かせる発想の一つとして、ティームティーチングによる支援に取り組んでいる。

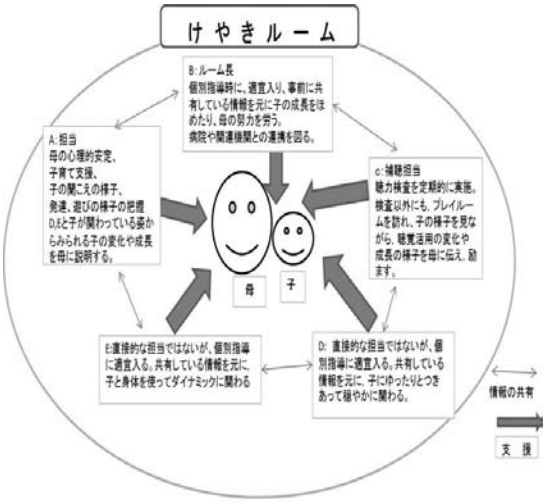

図7　チームティーチングによる支援の例

複数の担当者が子どもに関わるという点では、小学校等で行われているティームティーチングが連想されやすいが、ここで目指す支援は、根本的に考え方が異なる。ここで目指すチームによる支援は、指導的－補佐的といった固定的な役割分担をとらず、複数の担当者が、母子の情報を共有し、それぞれの持ち味や立場を生かしながら共同して母子に関わっていくことが基本となる。

経験年数や年齢、得意とする関わり方等が異なる複数の担当者が、それぞれの違いを認め合い、良さを生かし合いながら率直に意見を述べ合い、情報共有と話し合いを重ねることの意義は大きい。初任の

担当者にとっては、実践を通しての生きた研修となり、経験のある担当者にとっても、多面的で手厚い母子支援が可能となり、母の心理的安定感をより確かなものにする実感を得る機会となった。

母子を中心にし、けやきルーム全体で支援をしていくためには、それぞれの立場で、率直に意見を述べあえる担当者同士の人間関係も重要である。全国的に見ても、乳幼児教育相談の、人員の配置、専門性の維持に関しての課題が挙げられている。これらの改善の必要性に関しては、以前からいわれているものの（庄司ら2003)、現在も対応に苦慮しているところが多いのが現実である。

小田（2003）は「チーム保育が成立するための必要な条件」として、次の４つを挙げている。

・一緒に指導計画を立案する
・一緒に教材研究、準備を含め環境の構成をする
・一緒に指導する
・一緒に反省、評価する

これは、幼児教育分野での提言だが、現在のけやきルームでの取り組みに非常に近いものである。

全てのプロセスにおいて、複数の担当者が「一緒に」関わり、率直な意見交換を重ねることで、母子の支援を個人技ではなく、けやきルーム全体での共同支援として位置づけていくのである。

この実践を通して、現時点での良かった点と改善点の事例を紹介したい。

・良かった点

必要な情報の共有を徹底したことにより、結果として、母親の心理面の安定に手厚い支援ができたことである。

ある母親は、「Ａ先生もＢ先生と言い方は違うけれど、同じ事を言ってたんですよね。いろんな場面で、いろんな先生が言ってくれる言葉が、どれも今の自分の悩みに関係のあることでした。ここにくるとみんなに守られてる気持ちになれるんです。Ａ先生に相談していた内容を先日Ｂ先生も心にかけてくれて声をかけてもらって。とても嬉しかったです」と話してくれた。

また別の母親。「担当者はいますが、ここでは、スタッフみんながママとＣちゃんの応援団です。困ったことがあったら、いつでも誰にでもかまわないから遠慮せず話してね。」と担当者間で情報の共有をしていることを伝えると、一瞬驚いたような表情を見せ、その後「うれしいです。担当の先生しかわからないとおもっていたので。Ｃのこと考えてくれている人がたくさんいるんですね」と涙ぐんだ。

直接の担当者が変わっても、個々の悩みやそれに対する支援の方向性は、確かに引き継がれていくということが母親に伝わっていくことを大切にしたい。

・改善点

50組近い母子に関する情報共有を図り、話し合いをしていくために要する時間はかなりのものである。現在、今一番手厚さが必要な点にしぼってはいるが、週の記録へのコメント記入、教材づくり、指導記録への記載、基本的な支援内容の確認など、日常業務の中での時間の確保に苦慮している。母親支援という視点から考えて、チームティーチングは有効であるという実感を持つ。そのために、今後、どのようにその時間を確保していけるか、具体的な方法について考えていきたい。

引用・参考文献

庄司和史・斉藤佐和・松本末男・原田公人（2011）新生児聴覚スクリーニングの進展と聾学校における乳幼児支援体制の現状－乳幼児支援担当者に対する調査から－．特殊教育学研究，49（2），135－144.

庄司和史・宍戸淳子・青山浅日・林徳子・吉野賢吾（2003）乳幼児教育相談の現状と課題．筑波大学附属聾学校紀要，24，2－13.

中村公枝（2004）聴覚障害乳児の早期療育．音声言語医学45（3）．217－223.

厚生労働省(2007)新生児聴覚スクリーニングマニュアル．厚生労働科学研究子ども総合研究事業「新生児聴覚スクリーニングの効率的実施および早期支援とその評価に関する研究班，厚生労働省1－10

佐藤操・庄司和史（2010）聴覚障害児の早期発見に伴う保護者の心情に配慮した支援について－新生児聴覚スクリーニング受検時の保護者に対する面接調査の結果から－．筑波大学特別支援教育研究．3．2

－12
小田豊（2003）幼児が育ち合う工夫の場としての「ティーム保育」．新たな幼稚園教育の展開．東洋感出版社.
松村康平（1973）児童臨床学．光生館.
田口恒夫（1976）言語発達の臨床．光生館.